衝撃と反復

——フロイト「科学的心理学草稿」による心的外傷の考察——

岡　崎　宏　樹

何ものかが私に書かせている。思うに、恐怖が、狂ってしまうことへの恐怖が、私を書く行為へと駆り立てている。　　G.バタイユ『ニーチェについて』

はじめに

圧倒的な体験というものがある。愛する人の死、突然の事故や災害、暴力的虐待、戦争の限界状況、あるいは奇跡的勝利、悲劇的感動、至高体験。それらの衝撃は、予期や信頼によって構成された社会空間を突如切り裂き到来し、圧倒的な力で私たちを後戻り不可能な地点にまで運び去る。ときにそれは人格さえも変容させてしまう。あたかも衝撃によってひとは特異な力の運動へと巻き込まれ、もはやその論理に規定されて生きるほかなくなるかのようである。こうした衝撃がもたらす運動とは、その論理とはどのようなものなのだろうか。このような関心をいだくとき「心的外傷」が精神医学的な定義と治療の問題ではなく、衝撃は社会に生きる人間に何をもたらすのかという問いを照らし出す現象としてたち現れる。

本稿は、フロイトの初期論考「科学的心理学草稿」（以下「草稿」と略）を通して「心的外傷」およびその「回復」とよばれる現象を考察する。「草稿」はエネルギー経済論の視点から心的現象全般に一貫した記述をあたえようとする試みである。「草稿」理論による考察は、衝撃がもたらす運動をエネルギーという力学的観点からえがきだすことを可能にしてくれる。「草稿」は「心的外傷」を主題としては論じていないけれども、「苦痛」の概念が理解のための重要なてがかりをあたえるだろう。

前半の「草稿」理論の検討にもとづいて、後半では「心的外傷」からの「回復」とは何なのかを考察する。ただし数多ある心理療法を詳細に検討する余裕はなく、また筆者にその能力もないので、考察の対象は「快感原則の彼岸」でフロイトが取り上げた子供の糸巻き遊びに限定される。対象は限定されているが、この遊びがもつ多義性が考察に広がりをあたえてくれるだろう。ここで私たちは、衝撃のもたらす運動がさまざまな反復現象とし

て現れることに気づくだろう。私たちはそれらの諸水準を検討する必要がある。

本稿は照準を体験という位相に合わせた原理論的考察であるが、ここから引き出される帰結にはいくつかの社会学的インプリケーションが含まれるはずである。集団にとっての外傷的歴史的事件をはじめ、都市生活における不断の刺激の影響、宗教集団における宗教体験、儀礼的殺人、さまざまな自虐的行為、葬送儀礼や祝祭、ドラッグ・カルチャー、聖なるものなど、強烈で衝撃的な瞬間をはらんだ現象の理解につとめる社会学的思考にたいして何らかの示唆をあたえることができたならば、本稿の目的は達せられたと言うべきであろう。

1．ニューロン・モデル

1－1．「草稿」の可能性

フロイトが「死の欲動」という概念を提示する直接の契機となったのが戦争神経症であったことにはもっと注意が払われてよいだろう。第一次世界大戦における衝撃的な体験は兵士たちに戦争神経症という名の「心的外傷」をもたらしたのだった。極度に不快な外傷的状況の一場面を強迫的なまでに反復する兵士たちの夢は、通常の夢がそうであるような願望充足の夢ではありえない。そう考えたフロイトは、これを初期の状態へと回帰しようとする心の根本的な傾向を示す現象としてとらえた。生命が回帰すべき初期の状態とは死にほかならない。そこでフロイトはあらゆる生命にそなわり人間の無意識を駆動する根本傾向を「死の欲動」と名づけた。後期フロイトにおいて人間存在は「死の欲動」（タナトス）と「生の欲動」（エロス）が対峙する場へとおかれたのである。

戦争神経症との出会いから引き出された「死の欲動」という難解かつ重要な概念を通して「心的外傷」を解釈することには十分な意義がある。しかし、個体および集団の自己保存の根本原則を当然と見なす社会学的思考からすれば「死の欲動」という前提はあまりに独特で奇異に思われるだろう。それゆえ、この超越論的前提を受け入れるかどうかが理論的妥当性の検討以前に問題となり、結局は実証性を理由にその理論的意義が切り捨てられるかもしれない。エロスとタナトスの果てしない闘争という「神話的」な舞台の上で語るのとは別の方法で同じ問題について語ることはできないだろうか。本稿は「草稿」理論の検討を通してこれを試みることにしたい。フロイトの最初期の論考である「草稿」は、後に用いられる「無意識」の概念に頼ることなく、ニューロンという神経学的な概念装置だけをもちいることで、あらゆる心的現象に一貫した記述をあたえようとしている。未完で

あるがゆえの曖昧さは否定できないが、単純な概念装置だけを用いた徹底的な思考実験は、結果として、「死の欲動」によってフロイトが呈示しようとした運動の論理をより把握しやすいかたちで示しているように思われる。ニューロン・モデルが内包しつつ展開する論理をとりだすことができたならば、後期理論によって解釈するに劣らず明確なかたちで「心的外傷」を把握することができるかもしれない。とはいえ「心的外傷」はこの初期論考の主題ではないから、外傷からの「回復」に関しては後期の論考も援用して考察をすすめなければならないだろう。

「草稿」が用いた概念装置はわずかである。量Quantität の略号Qと表記されるエネルギー、「量遮断装置（＝神経末端装置）」、心的装置を構成する五種類のニューロン――ファイ（ϕ）、プサイ（ψ）、オメガ（ω）と略号表記されるニューロン、分泌性ニューロン（＝鍵ニューロン）および運動性ニューロン[1]。たったこれだけの道具によって「草稿」はあらゆる心的現象を説明するのだが、そのすべてに言及する余裕はないので、以下ではとりわけ主題に関連している「記憶」「苦痛」「不安」「自我」の四つを中心に考察することにしたい。

1―2．Qとは何か

「草稿」がQと表記するエネルギーには刺激・興奮・備給といった量の側面と周期の側面がある。エネルギーの量的側面について言及する場合、本稿では量Qと記述することにする。ところでフロイトは特に説明もなくエネルギーを量Qとも量Q'nとも表記しているが、この違いは何を意味しているのだろうか。未完の論考であるために曖昧な部分はあるのだが、英訳者のジェイムス・ストレイチーの解釈によれば、量Qは外界の量であり、量Q'nは生体内部の量を示している。また量Qは外界および内界の量一般を表す場合もある［SE1, p.294］。外界のエネルギーと内界のエネルギーは相関しているが混同すべきではないので、本稿は量Qをエネルギー一般ではなく、外界のエネルギーのみをさすものとして表記したい。

この区別は些細なことのようにみえるが、ここには私たちの知覚についての重要な問題が含まれている。たとえば私たちが味を知覚するとき、味覚の原因である外界の物質そのものが舌を通過して伝達されるのではない。外界の刺激が内部の刺激へと変換され、外界

---

[1]フロイトの手稿はϕ ψ ωといった記号で表記されているが、まぎらわしい印象を与えるので、本稿は「ファイ・ニューロン」とあえてカタカナで表記することにした。なお本文で特にふれなかったが、運動性ニューロンは量Qを筋肉内へと導くニューロンである。

の指標としての内部刺激が生体内に伝達されるのである。「草稿」は心的装置の末端に「量遮断装置（＝神経末端装置）」を想定している。フロイトは「量遮断装置」を「外因性のQの商が通り抜ける」と述べているが、この記述は外界の量Qの一部があたかも心的装置へと流入するかのような印象を与える。私たちは量遮断装置を濾過装置や櫛としてではなく、外界の刺激量Qを内界の刺激量Q'nへとかえる変換装置として表象した方がよいだろう。そうすれば「草稿」に含まれる次のような視点が明確になるはずだ。すなわち、私たちは絶対不変の客観的な現実をそのままに知覚しているのではなく、つねにすでに変換された指標に基づいて構成しつつ現実を理解しようとつとめているのである。

心的装置は、利用可能な量Q'nを活用しつつ外因性・内因性の量Q'nを放出することによって快をえようとする根本的な傾向——後に「快感原則」と命名される——をもつと仮定される。不快が何であり快が何であるかは難しい問題であり、これについては本稿１－７において詳しく検討するが、さしあたっては心的装置において刺激量Q'nの増大は不快、その低減は快として感受されると考えることにしよう。

１－３．記憶痕跡——ファイとプサイ

私たちは新たな刺激を次々と受け入れてそれを知覚する一方、生起した出来事の記憶を永続的に保持し回想している。この相反するはたらきを表象するには、どのような心的装置を見出す必要があるだろうか。「草稿」はファイとプサイの二種類のニューロンを仮定することによってこの問題に答えている。

ファイは「（なんの抵抗もしないし、なにも滞留させない）透過性」のニューロンである。ファイはつねに新たな量Q'nを通過させ、通過後は以前と同じ状態へと戻る。外因性の刺激量Q'nはファイ・ニューロンを伝達して筋肉組織にいたり、筋肉の運動によって放出される。ファイ・ニューロンはプサイ・ニューロンにも伝達している。

プサイ・ニューロンは非透過性のニューロンである。非透過であるのは刺激量Q'nの通過に対する抵抗としてはたらく「接触防壁」をもつからである。プサイ・ニューロンは接触防壁の抵抗によって刺激量Q'nを吸収しつつ通過させる。抵抗による吸収において刺激量Q'nの一部はプサイ・ニューロン内にとどまる。量Q'nがニューロンに充填されている状態をフロイトは経済論的に「備給された」状態と記述する。非透過性のプサイ・システム[(2)]は刺激量Q'nを備給し、その放出を一時的に遅らせることができる。

[(2)]ニューロンについて「システム」と記述するときは、複数のニューロンの連関をさす。

プサイ・ニューロンに一定度の大きさの量Q'nが通過するとき、接触防壁には以後の疎通を容易にするような永続的変化が刻み込まれる。ただし量Q'nが接触防壁の抵抗を越えるほど大きくない場合にはこれを通過できず、それゆえ変化を刻み込むこともない。一定度の量Q'nの通過を重ねることで、各プサイはさまざまな抵抗をもつもの、フロイトの表現によれば、さまざまな「疎通の度合い」をもつものとなる。

以上の仮定から記憶のメカニズムが説明される。記憶とは記憶痕跡である。そして記憶痕跡とは、量Q'nが不可逆の変化の痕跡を接触防壁に痕跡づけながら、さまざまな抵抗をもったプサイ（ψ）のシステムへと配分されることである。これをフロイトは「記憶はψニューロン間の疎通の差異 Ünterschiede in den Bahnung によって表される」と記述する［SE1, p.300 ：238頁］。

記憶痕跡としてのプサイ・ニューロンは同時連想によって他のプサイと結びつく。過去の記憶の想起とは、それら複数のプサイの連関へと量Q'nが再備給されることにより、その記憶像が幻覚的にたちあらわれることである。

この説明は明解であるが、これではオリジナルな過去の出来事の記憶痕跡が再備給によってコピーのように再現するのが記憶の想起であるという単純な解釈であるようにも読めてしまう。

けれども「草稿」を友人フリースに送ってから約一年後、同じくフリースに宛てたフロイトの書簡（1896年12月6日付）を読めば、理論の重心が神経学的モデルから「書記的概念体系[3]」へと推移するとともに、記憶の理論がより精緻なものへと発展していることが分かる[4]。「書簡」によれば、記憶痕跡とはつねにすでに「指標＝記号」としての登録であり、記憶が意識に想起されるまでには心的過程において少なくとも三回は書き移しがなされるのである。

登録ないし書き移しという心的過程を基本的なものと見なす「書簡」では、オリジナルのコピーとしての再現という発想は払拭されている。しかしここでは「意識」「前意識」「無意識」という局所論的発想が呈示される一方で、それらが「草稿」の基本視座であるエネルギー経済論の発想とどう関連しているのかについての説明がない。私たちは「書簡」に描きだされた「書記的概念体系」と「草稿」のエネルギー論を交差させつつ、有効な隠

---

[3]ジャック・デリダ「フロイトとエクリチュールの舞台」『エクリチュールと差異（下）』三好郁朗訳、法政大学出版局、1983年、72-73頁参照。

[4]*The Complete Letters of Sigmund Freud to Wilhelm Fliess 1887-1904* , translated and edited by Jeffrey Moussaieff Masson, London, 1985, pp.207-208.
この書簡における議論については以下に詳しい。若森栄樹『精神分析の空間――ラカンの分析理論――』弘文堂、1988年、149-151頁。湯浅博雄『反復論序説』未来社、1996年、64-71頁。

喩的モデルとして心的装置を表象する方法を考える必要がある。そのために、プサイ・ニューロンをニューロンという響きがもつ神経学的イメージから解き放し、それを移動する指標として表象することにしよう。プサイとはプサイ＝指標であり、記憶の痕跡であると同時に量Q'nの媒体なのである。

この観点にたてば知覚と記憶のメカニズムは以下のような過程として理解されるだろう[5]。ある出来事における外界の刺激量Qは量遮断装置において外因性の量Q'nへと変換される。外因性の量Q'nが透過性のファイを通過してプサイへと伝達されたとき、それが知覚として意識される。

伝達された量Q'nは「知覚指標」としてプサイに登録される。登録されるとは、量Q'nがプサイを通過する際、接触防壁の抵抗に永続的な変化が刻まれることである。この最初の登録を受けたプサイ＝指標は一定の量Q'nを備給しているために自由に移動し、同時的連想、因果関係によって他のプサイ＝指標と結びつき、二度目の登録を受ける。以上の二度の登録が行われる過程を局所論的に表象するならば、それは「無意識」とよびうる。「無意識」の過程にあるプサイ＝指標は、一定の言語表象と結びついた様態へと書き換えられる場合にはその自由な移動を静止し、拘束された状態へとおかれる。拘束されたプサイ＝指標が配備されている場を想定するならば、それは「前意識」とよばれる。「前意識」の過程にあるプサイ＝指標にたいし量Q'nの再備給がなされると外因性の量Q'nによる知覚と同様の効果が生じる。すなわち言語表象に結合した様態で書き換えられたプサイ＝指標が「意識」の場に幻覚的に再生される。これが記憶の想起である。

１－４．圧倒的な体験――苦痛

心的装置は伝達された一定量の刺激量Q'nを、反射的な筋肉運動によって放出したり、接触防壁の抵抗を利用した一時的な備給を経た後に放出することによって対処している。ところがこうした処理能力の限界を越えた過大な量Q'nが伝達された場合はどうなるだろうか。衝撃的な刺激の到来によって心的装置のはたらきは完全に麻痺し、パニックに陥ってしまうに違いない。圧倒的な量Q'nの侵入、それをフロイトは「苦痛」と名づける。

フロイトによれば、苦痛はプサイ（ψ）の接触障壁の抵抗を完全に失わせ、プサイをファイのような透過性の通道にしてしてしまう。「おそらく苦痛はψの中に――まるで稲妻の一撃があったかのように――永続的な通道を残すであろう」［SE1, p.307：244頁］。

---

[5]後にフロイトが呈示する自由エネルギーとその拘束の議論も組み込んでおいた。

苦痛は、快楽原則にのっとる心的装置のはたらきを破綻させる破滅的な出来事である。しかしながら事後的にみるならば、苦痛によって心的装置はより大きな快と不快の経験へと開かれるとも言えるだろう。なぜなら苦痛は圧倒的な力で接触防壁の抵抗を無にし、ファイのように透過的な通道をプサイにつくりだすが、この新たに形成された通道は、事後的にみると、量Q'nの通過をより容易にし、その限りで量Q'nの放出をより広い範囲で保証するものとなっているからである。この指摘を行なった若森栄樹は、そこから次のような逆説的な結論を引き出す。

「快楽原則は常に破綻することによって貫徹されるのである[6]」。

苦痛は快楽原則を破綻させる。しかしこれによって心的装置が受容しうる量Q'nの総量が増大するならば、結果的に見れば、より高水準の快を享受する可能性が開かれると言えるだろう。あたかも限界を超えて破綻することこそが快楽原則の貫徹であるかのようである。

この若森の議論に急いで付け加えておくならば、苦痛はより高水準の快とともに、より高水準の不快の可能性も開くと言わなければならない。フロイトが当初、快楽原則（快感原則）を不快原則とよんでいたことに示されているように、〈不快があってはじめて快が成立する〉。この二重性を念頭に述べるならば、〈苦痛は世界感受の量としての絶対度を高める〉のである。

１－５．根源的不安

私たちは苦しい経験を思い出すと不安で不快な気分になる。ましてや生存の危機を感じるほどの苦痛を体験したらならば、それが回想されるときに喚起される「不安」は甚大なものであるだろう。もし不安を和らげるものがなければ、苦痛をめぐる記憶が想起されるたびに不安が喚起され、それが果てしなく昂進してしまうかもしれない。ところで、このような不安の情動として放出されている刺激量Q'nはいったいどこに由来するものなのだろうか。苦痛の体験において流入した刺激量Q'nだろうか。そう考えるとうまく説明がつかない。なぜなら不安の情動のエネルギーは何度喚起されてもいっこうに枯渇せず、喚起されるたびに強烈で新鮮であるからだ。刺激量Q'nを付け加えることで不安を亢進させる何かが存在する。そう考えたフロイトがたどりついたのが「分泌性ニューロン」という仮

---

[6]若森前掲書、143頁。ヘーゲル読解にもとづいたラカン理解をふまえて「草稿」を論じるこの書の第三部第一章からは多くの示唆を受けた。

説である。この仮説によれば、高水準の量Q'nがプサイに備給される極度に不快な経験においては、その記憶痕跡であるプサイと分泌性ニューロンとのあいだに通道がつくられる。ゆえにこの記憶が想起されると同時に分泌性ニューロンにも量Q'nが伝達される。分泌性ニューロンは刺激を受けると新たな量Q'nを供給するため、不安の情動がよりいっそう昂進すると考えられる。

フロイト自身が「奇異な、しかし不可欠な仮定」と記している分泌性ニューロンという仮定をたてなければ心的装置の全般的なはたらきを説明できないことは、不安が人間存在にとって不可避の根本条件であることを示しているように思われる。

1－6．備給としての自我

「自我」という機構は、苦痛に由来する根源的不安を抑制するはたらきをする。「草稿」の「自我」が、エス・自我・超自我からなる後期局所論の自我のように、ある特定の場に存在する実体として表象されていないことに注意したい。「草稿」が定義する「自我」は「その時々の ψ 備給の総体」であり、この総体は「永続的要素と変動的要素」から構成されている。「自我」は、特定の目的と方法でプサイ＝指標へと量Q'nを調節しつつ備給するはたらきの総称である。

「自我」と総称される備給の一つが「抑圧」である。通道には「ある量が一つのニューロンから他へと移動する場合、備給されていないものよりも備給されているニューロンに移るほうが容易である」［SE1, p.319：255頁］という特性がある。これを利用すれば、分泌性ニューロンと通道したプサイ＝指標に大きな備給が伝達されるのを回避し、不安の昂進を抑止することができる。隣接するプサイ＝指標にあらかじめ「側面備給」（後の用語では「逆備給」）しておけばよいのである。そうすれば、量Q'nが問題のニューロンへと向かっても、すでに備給を受けた隣のニューロンへと移動するため、分泌性ニューロンはわずかしか刺激されず、喚起される不安も少なくなる。

過剰な願望備給の制止もまた「自我」と総称されるはたらきの一つである。オメガ・ニューロンはプサイに高水準の備給がある場合に「現実標示」としての量Q'nの放出をおこなう。現実標示は通常は知覚像にのみ与えられ、低水準の備給である回想像に与えられることはない。ところが快感原則は願望対象の回想像にたいし過剰な備給を促進するから、オメガはこれにも現実指標を与えることになり、ここに現実と幻想の混同が生じてしまう。回想像への備給を一定限度に押さえるはたらきがあってはじめて知覚と回想の区別が確実になるのである。この区別を基盤にして現実判断、認識、思考の自我備給が可能になる。

抑圧や過剰な願望備給の制止などにより、生体はより良く外的現実に適応できるようになるだろう。フロイトはこれら「自我」と総称される備給を「二次過程」とよび、不安が限りなく昂進したり、快感原則によって幻覚にいたるまで願望備給が促進される「一次過程」と区別している。

１－７．快の論理構造の転換

一次過程から二次過程への移行とはまさしく「自我」の定立にほかならない。ここで注目すべきは、竹中均が「草稿」の綿密な読解を通して呈示した議論である。竹中は、一次過程から二次過程への推移が快・不快をめぐる論理の転換をともなうと主張している。竹中によれば、この推移において快・不快を感受する論理が、内包量 intensive quantity（密度・勾配・速度のような『強さ』を意味する量）から外延量 extensive quantity（長さ・重さ・面積のような『広がり』あるいは『大きさ』を表す量）へと転換するのである[7]。内包量としての快・不快とは、一瞬ごとに増減する量の変化の度合いであり、外延量としての快・不快とは、全体的な基準に照らして判断された量の大きさである。この転換において決定的なのは、「全体的な基準」が定置されることである。厳密に言えば、外延量において、内包量とは質的に異なる〈全体性〉が定置されることである。内包量における全体は最強度の部分によって代表される。その意味で全体は部分と隣接した水準にある。他方、外延量における全体は諸部分の算術的総和である。つまり外延量における全体は諸部分とは異なる水準、メタ・レベルの水準に君臨している。一次過程から二次過程への移行とは、快の論理が内包量から外延量へと転換することであり、新たな水準の〈全体性〉が定置されることである。

では心的過程における〈全体性〉とは何であり、それはいかにして定置されるのだろうか。竹中は「〈一次過程的全体（＝最強度の部分）を追放すること〉によって、一次過程から二次過程への（擬似的）転換が可能になる[8]」という考えを呈示する。もちろん、単に最強の部分を追放しても二番目の部分が次の最強部分となるだけで、この転換はおこりえない。それを可能にするのは〈一次過程全体〉（＝最強度の部分）を「追放すると同時

---

[7]内包量と外延量については以下を参照した。竹中均「快の論理構造――エディプス・コンプレックスのコミュニケーション的展開――」（下記同タイトルの論文の別ヴァージョン）、1993年、未発表。ただしインターネット・ホームページにて公開中。http://risya3.hus.osaka-u.ac.jp/takenaka/takenaka.html

[8]竹中均「快の論理構造――エディプス・コンプレックスのコミュニケーション的展開――」『ソシオロジ』116号、社会学研究会、1993年、121頁。

に、維持すること」であるはずだ。竹中は「まさに、精神分析における「抑圧」という概念こそが、このような状態を意味している[9]」と述べる。抑圧とは二次過程のはたらきそのものであったが、ここで竹中が言う抑圧は二次過程の諸々の抑圧を可能にするような〈抑圧〉、いわば原抑圧である。

１－８．不安からの跳躍――根源的信頼へ

竹中の議論をニューロン・モデルに即して考えてみよう。このモデルにおいて一次過程全体を代表しうるような最強度の部分とは何であろうか。それは最強度の体験としての苦痛であると考えられる。では苦痛体験を「追放すると同時に維持する」こと、すなわち苦痛体験を〈抑圧〉することは、一体どのような事態として説明されるだろうか。

苦痛とは心的装置の処理能力の限界を超える圧倒的な出来事であった。このような出来事が再来するのではないかと怖れているかぎり、苦痛をめぐる出来事がつねに想起され（後論するように極点は想起不能である）、分泌性ニューロンによって不安が無限に昂進してしまう。しかし生にたいして別の構えをとることも可能である。苦痛は去った、今後これ以上の不快は到来しないだろうと想像的に仮定するのである。すでに経験された最強度の体験が今後想定される諸体験においても最強であると想像的に仮定することは、過去の苦痛体験を今後予期される諸体験全体の基準として定置することを含意している。だから、このとき苦痛体験は全体の基準として「維持」されると言えるだろう。

二度と起こりえないという想像的な仮定が可能となるためには、苦痛をめぐる一連の記憶が意識過程から「追放」されていなければならない。しかしそれをおこなうためには、ある決定的な跳躍が必要であるように思われる。生において苦痛が再来するかしないかなど誰にも予期しえない。その意味で世界はまったく不確定である。しかしながら苦痛体験に由来する甚大な不安から何としても逃れようとする主体は、世界は予期可能であるとみなす根源的信頼の構えへと一気に跳躍する。というのも、主体に与えられているのは、根源的不安におかれたままであるか、それとも想像された根源的信頼のうちに安らうかであるからだ。不安にせきたてられて信頼へと跳躍するとき、苦痛体験は〈抑圧〉される。苦痛体験を追放しつつ維持する〈抑圧〉の可能性とは世界にたいする根源的信頼（への跳躍）の可能性である。根源的信頼は権威ある他者へと投射される可能性が高いが、投射をうける対象が誰であるか――父であるか分析医であるか神であるか――は蓋然的な問題である

---

[9]同前、122頁。

だろう。

最強部分である苦痛体験を全体の基準として定置する作業はまったく想像的なものであるから、その意味で擬制としての定置にすぎない。しかしながらひとたび定置されればそれは諸部分とは別の水準に存するものとしての一種独特の効果をもつことになるだろう。〈全体性〉水準の質的な転換がおこるからである。竹中が明らかにした快の論理構造の質的転換をともないつつ、想像的に定置された全体は「自我」と総称される諸々のはたらきを保証する効果をもったメタ・レベルの審級として存立することになるだろう[10]。この新たな〈全体性〉の水準を、審級としての「自我」とよぶこともできるだろう。審級としての「自我」が存立してはじめて「自我」備給が可能になるのである。

2.心的外傷と糸巻き遊び

2－1．苦痛としての外傷的体験

「心的外傷後ストレス障害（PTSD）」の定義をめぐる議論の紛糾が示しているように、「心的外傷」を明確に定義づけることは容易ではない。そもそも心の傷という表現が比喩であることを意識しないままに「癒し」や「回復」について何事かを語っても、いっそう事態を混乱させるだけだろう。それゆえ心の傷という比喩の意味をより理論的に検討することは必要な作業であるはずだ。

「心的外傷」を「草稿」モデルという独特の理論的視座からとらえるならば、それは苦痛として記述される。「草稿」の概念によって述べるならば、「心的外傷」とは心的装置が対処不能な圧倒的な量Q'nがプサイに侵入する衝撃的な体験、苦痛を原因として形成される諸症候である。経済論的視点からより一般的に記述すれば、「外傷の特徴とは、主体の許容度と、刺激を精神的に支配し加工する能力に比べて、そこに集まる刺激の量があまりに多過ぎるということである[11]」。

苦痛を原因として「心的外傷」が生起すると述べる際に注意すべきなのは、この場合の

---

[10]気づかれるように、ここでの立論は大澤真幸による〈第三者の審級の先行的投射〉の議論を念頭において展開している。本稿が強調するのは、この投射が苦痛による不安を契機とするという論点である。大澤真幸『身体の比較社会学Ⅰ』勁草書房、1990年、61-65頁参照。

[11]ラプランシュ・ポンタリス共著『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1997年、47頁の「外傷（心的外傷）」の項目を参照。

苦痛が「自我」定立以降の出来事だということである。「草稿」において苦痛は「自我」定立以前の段階において記述されていた。「自我」定立以前の苦痛を「苦痛1」、それ以後の苦痛を「苦痛2」と便宜上区分し、その違いを検討するところから「心的外傷」の考察を始めたい。

「苦痛1」も「苦痛2」も、過度の量Q'nの侵入という点では同じである。異なるのは、「苦痛1」を引き起こすのがもっぱら外因性の量Q'nであるのにたいし、外因性・内因性の両方の量Q'nが「苦痛2」の原因となりうる点である。「快楽原則の彼岸」の外傷神経症に関する議論では外因性の刺激がその主原因とみなされ、外界の刺激を緩衝する「刺激保護」を突破して過大な刺激が侵入するときに外傷が起こるのだと説明されている［SE18, pp.24-33：167-170頁］[12]。注目すべきなのはこれに続く部分である。ここでフロイトは「刺激を受け入れる皮膜層の刺激保護が、内部からくる興奮にたいして欠けているために、この刺激伝達が大きな経済論的意味をもつようになり、しばしば外傷性神経症と同列におかれる経済的障害をひきおこす機縁となるにちがいない」［SE18, p.33：170頁］と述べ、外傷が内部の刺激によっても生起しうる可能性を示唆しているのである。

外因性・内因性両方の刺激が「苦痛２」を生起させると考えても、ニューロン・モデルには何の矛盾も生じない。苦痛は、どこに由来するものであれ、過大な刺激量Q'nがプサイに侵入することとして説明されるからだ。

「心的外傷」にとっては意味的な衝撃が、外界からの物理的衝撃と同じくらいの重要性をもつ。たとえば、愛する人を失うことが衝撃的であるのは、その知覚が強烈であるからではなく、それが予期しうる世界、意味としての世界を突如引き裂くからであり、またそれによって主体が圧倒的な情動の奔出に貫かれるからである。奔出しプサイに侵入する内因性の刺激量の源泉を二つ考えることができる。一つは欲動の刺激（＝有機体の衝動）であり、もう一つは不安の情動である[13]。苦痛を生起させる刺激量Q'nに不安の情動を含めることには多少の説明を要する。

論考「制止、症状、不安」においてフロイトは外傷的状況を「無力の状況」と定義し、これを危険状況と区別している［SE20, pp.166-167 ：372頁］[14]。無力の状況とはなすすべもなく、よるべもない状況である。この絶対的な「無力さ」を経験した主体には、同じ状況に陥らないためのシグナルを与えられる。それが不安の情動である。「不安は外傷のさ

---

[12]「接触防壁」という概念は多義的である。これはニューロン・モデルにおける「量遮断装置」、接触防壁の抵抗、注意の自我備給などを含んでいるから、厳密な議論のためには「草稿」理論の方が有効だろう。

[13]「草稿」は欲動を「恒常的に圧迫する力」と説明しているが、至高体験のようにこれが奔出する場合もありうるだろう。

いの無力にたいする基本的な反応であって、この反応は後になって危険状況におかれたとき、援助の信号として再生される」［SE20, p.166：373頁］。

ところが、危険における「援助の信号」となるべき不安は、過剰なまでに昂進するならば、それ自体が危険で破壊的なものとなってしまう。「草稿」はこのような過剰な不安の情動を、不快な体験の記憶痕跡と通道した分泌性ニューロンが産出する刺激量Q'nによって説明していた。心的装置は、世界への根源的信頼が見失われ「無力さの状況」におかれたとき、自らの情動によって破滅する可能性を内包している。このように自己破壊的な不安が心的装置の一次的条件であるとするならば、分泌性ニューロンを理論的に仮定した「草稿」には「第一次マゾヒズム」という後期フロイトの重要な概念がすでに書き込まれていると見ることができるかもしれない[15]。この視点からすれば、攻撃性（サディズム）は一次的条件としての不安を外部対象に振り向けられたものと解される。

以上よりまとめるならば、「苦痛2」としての「心的外傷」の発生条件は、主体が「無力さの状況」におかれ、なすすべもなくむきだしのまま過大な内因性･外因性の刺激の侵入にさらされることである。

2－2．糸巻き遊びとフロイトの二つの解釈

「心的外傷」を「苦痛2」としてとらえる視座からすれば「心的外傷（トラウマ）」からの「回復」はどのような事態として理解されるだろうか。この問題を、フロイトが「快感原則の彼岸」で取り上げた子供の糸巻き遊びの事例を通して考えることにしたい[16]。この遊びは母親の不在による苦痛体験にたいする反応であり、外傷からの「回復」の意味をもつ行為であるように思われるからである。「心的外傷」と「回復」の周囲にはさまざま

---

[14]外傷発生の条件を「無力の状況」から説明すれば、はからずも現代の心的外傷論の一つと共通することになる。精神科医ジュディス・L・ハーマンは、レイプや児童虐待、戦闘参加帰還兵など多くの諸例とそれをめぐる理論を検討し、フェミニズム思想を背景として『心的外傷と回復』（1992年）を著した。理論の体系性よりは、症例を観察する冷静な的確さと、幾多の臨床経験に支えられバランスのとれた記述によって印象づけられるこの著書が、心的外傷の体験の中核としてあげているのが「無力さdisempowerment」と「他者からの離断disconnection」である。他者からの離断はむしろ無力さを決定的にする一要因であり、心的外傷の中核は「無力さ」にあるように思われる。Judith Herman, M.D., *Trauma and Recovery*, New York, 1992,『心的外傷と回復』中井久夫訳、みすず書房、1996年

[15]「制止、症状、不安」の注でフロイトは、不安がマゾヒズム的な破壊性をもつことを示唆している。危険状況における現実の不安には「衝動的不安」が加わる場合が多いと述べたあと、フロイトは「したがって自我がひるむような満足を欲する衝動の要求は、自分自身にむけられた破壊衝動であるマゾヒズム的衝動であるかもしれない。おそらくこの添加物によって、不安反応が度をすぎ、目的にそわなくなり、麻痺し、脱落する場合が説明されるだろう」と記している［SE20, p.168：374頁］。

な水準における反復現象が登場する。それらをフロイトは「死の欲動」に駆動された「反復強迫」という仮説によって説明しているが、別の方法で説明することも可能であるだろう[17]。私たちは「草稿」モデルを基盤に検討をすすめよう。

フロイトは、一歳半になる孫が母の不在中に糸巻きを遠く放り投げては手繰りよせて遊ぶ姿を観察した。子供は寝台のへりごしへ遠く糸巻きを投げるときはオーオーと満足の声をあげ、再び見つけ出したときにはダーと快哉を叫ぶのであった。母親とフロイトの一致した判断によれば、オーとは「いない」fortの意味であり、ダーは「いた」Daであると考えられた。

一歳半の子供においてどの程度の「自我」が成立しているのかはわからない。しかし「自我」を備給のはたらきと考えるならば、この子供においても一定の「自我」備給はすでに可能になっており、その限りで「自我」の審級も成立していると言えるだろう。ところが母子一体の地平からまだ十分に出離していない幼い子供にとって保護者たる母が不在になることは非常に苦痛な体験であるだろう。この子にとって母の不在は苦痛体験をともなう外傷的出来事であり、糸巻き遊びはそれにたいする特別の反応とみなすことができる。

この「消滅と再現をあらわす完全な遊戯」についてフロイトは二つの解釈を呈示している。一方でフロイトは、子供は母を糸巻きに見立て、投げ捨てては見出すことによって、母親の不在―在を再現しているのだと解す。子供は母親が自分を置き去りにした外傷的状況を遊びによって反復的に再現しているのである。苦痛な体験をあえて反復するのは、受動的に体験するしかなかった出来事を遊びのかたちで再現することで能動に統御可能なものにし、そうして支配衝動を満足させているからである。

他方でフロイトは、子供は母親に見立てた糸巻きを投げ捨てることで、自分を置き去りにした母親に復讐し、その復讐衝動を満足させているのだと解している。子供は体験の受動性から能動性へ移行し、代理の対象へと復讐の攻撃をしているのである。別のところでフロイトはこの種の遊びに外傷の除反応の意味があることを認めている［SE18, p.167：73頁］。

---

[16]現代の諸知見をふまえて糸巻き遊びの多義的な意味作用を検討し、コニュニケーションとはいかにして可能かを論じる、樫村愛子「コミュニケーションと主体の意味作用」『ラカン派社会学入門――現代社会の危機における臨床社会学』世織書房、1998年、126-214頁からは多くを学んだ。

[17]ルネ・ジラールは模倣の欲望の観点から糸巻き遊びを解釈し「死の欲動」「反復強迫」に独自の注目すべき見解を与えている。『世の初めから隠されていること』小池健男訳、法政大学出版局、1984年、第5章C・D、637-657頁。

2－3．悪夢における反復と遊びにおける反復

外傷神経症者の夢の特徴は、悲痛な外傷的状況の一場面の鮮烈な印象を執拗なまでに反復することにある。他方で糸巻き遊びも外傷状況の反復である。ところがこれら二つの反復のあいだには根本的な違いがあることを理解しなければならない。

フロイトによれば、災害神経症者の悪夢は「不安を発展させつつ刺激の統制を回復しようと」しており、その機能は、快感原則に矛盾するものではないがそれとは独立しており、「快の獲得や不快の回避の企て以上に根源的なものと思われる」［SE18, p.32：169頁］。刺激が過大に流入した場合、心的装置には快感原則および現実原則に即して配備し、放出するという根源的な課題が生じる。制御を逃れて自由に動き回る状態にある刺激（＝自由エネルギー）を拘束しなければならないのである。心的装置が自由エネルギーをなんとか拘束しようとするからこそ、外傷的体験の回想像は夢として現れ、不安の克服をめざすからこそ、不快な記憶は再生される。しかしそうであるなら心的装置は奇妙な悪循環に陥っていると言わなければならない。刺激を克服するために不安という新たな刺激が創出されるが、それは単に新たな苦しみが付加するだけであるからだ。「草稿」理論は、自由エネルギーは分泌性ニューロンによってつねに付加されるのだから、それを拘束するいかなる試みも根本的な解決にはならないことを示している。このとき心的装置は反復することそれ自体が目的の自動機械である。フロイトは、災害神経症者がみる外傷状況の悪夢は願望充足に役立つのではなく「反復強迫」にしたがうのだと述べて、「反復強迫」にデーモニッシュという形容をあたえている。

外傷神経症者の悪夢と糸巻き遊びの違いは、悪夢が完全な受動性によって特徴づけられるデーモニッシュで機械的な反復であるのにたいし、糸巻き遊びは能動性をもった創造的な反復だという点にある。前者が不快な不安を形成するにとどまるのにたいし、後者は不安を形成するが、不快な刺激の放出が可能であるために快をもたらす行為となる。

2－4．カタルシスと象徴化

糸巻きの投擲は母親への復讐衝動を満たすとフロイトは解釈した。不快な刺激の放出はカタルシスの快感をあたえる。しかし糸巻き遊びは幾つかの点で通常のカタルシス行為や復讐の攻撃とは異なっている。

「心的外傷」を「回復」させる目的で施される心理療法の多くは何らかのカタルシス行為をめざしている。過大に流入した量Q'nが外傷を引き起こすのであれば、それをできる

だけ早く放出することが必要である。しかし「草稿」理論から考えるならば、外傷経験者が苦しむ不快な刺激量Q'nは、最初の体験における外因性の量Q'nよりはむしろ分泌性ニューロンが新たに創出する刺激量Q'nであるのだから、カタルシスは一時的には有効であっても、外傷にとっての根本的解決とはならない。不安を惹起する構造的な問題が解決されないのであれば、どれほど強烈なカタルシスも外傷の「回復」にとっては何ものでもない。

糸巻き遊びではこの点がどう解決されるのだろうか。自らに向かう破壊的な不安の情動を外部に振り向けるためであれば、その対象は何であっても構わないだろう。実際、この子はいろいろな物を放り投げていた。反復的遊戯に糸巻きが選ばれたのは、母の日常的な道具であるそれが母の身体の隠喩として考えられたからであろう。ここで重要なのは、復讐という行為ではなく、隠喩による事物の象徴化である。糸巻き遊びの場合、虚構として構築された空間において復讐衝動のカタルシスがもたらされる。虚構の空間を構築する象徴化能力の獲得が主体に自律性をもたらし、それが無力さによって引き起こされる不安を解消するのに役立ったと考えることができる。糸巻きを母の隠喩とみなすような象徴化能力の発達とともに主体はより深く言語の世界に参入する。主体に言語の世界が開かれることはこの遊びが「いた」と「いない」の原初的分節の言語をともなうことにも示されている。世界を分節化する言語の習得は社会化への第一歩となるだろう。

2－5．再想起と象徴化

糸巻き遊びは外傷的状況を虚構の空間における象徴的行為として能動的に再現する。代表的な外傷の心理療法である再想起もまた外傷的状況の能動的な再現である。再想起は抑圧され忘却されていた出来事を意志的に言語化する作業である。体験の情動を再び感受しつつできるだけ詳細に外傷状況を想起すれば外傷は治癒すると考えられている。

ところが、フロイトは明示していないけれども、「草稿」が示唆するのは想起の心理療法がかかえる根本的な困難である。ニューロン・モデルによれば、苦痛の極点については通常の意味での記憶は形成されず、したがってその出来事は通常の記憶としては想起されないという帰結が導かれるのである。極点の再想起は原理的に不可能であるだろう。なぜか。「草稿」は記憶の登録はプサイの接触障壁の抵抗へと量Q'nの通過の痕跡が残されることによって可能となると説明していた。ところが苦痛においては圧倒的な量Q'nの侵入が接触障壁の抵抗を完全に無効にし、プサイをファイのように透過性のニューロンにしてしまう。つまり苦痛においては記憶記載のメカニズムが完全に失効するために通常のかた

ちでの記憶は形成されないのである。透過性となったニューロンへ備給することはできないから想起も不可能となる。

確かに、一連の出来事のいっさいが記憶されないと考えるのは常識に反している。苦痛体験をめぐる諸々の出来事は記載され想起もされうる。しかし少なくとも苦痛の極点は、プサイを「稲妻の一撃」で貫く瞬間は、通常の記憶としては記載されないというのが理論的帰結である。だから苦痛体験の回想像は中心に穴が穿たれた記憶なのである。穴の周囲はひび割れ、はがれた断片だけが想起されるのだ——悪夢として、あるいは突然のフラッシュ・バックとして。

とはいえ極点は心的装置に何も書き込まないというわけではない。苦痛の最強度の瞬間は、プサイへの記憶痕跡としてではなく、新たに形成された通道の存在として厳然と刻み込まれるだろう。苦痛の極点を意志的に再想起すること、通常の回想のように言語化することは不可能である。それゆえ「通道の存在」として刻まれた「それ」を表出する試みはすべて、ある種の「表現」とならざるをえない。けれども表現を再想起よりも不確実で曖昧な再現とみなすべきではない。確実で明確な再現が原理的に不可能であるならば、不可能なものの表現は想起による再現とはまったく別の水準における展開であると考えるべきであるからだ。表現は言語をはじめとしたさまざまな記号をもちいて展開される。表現は、たとえ言語化をともなう場合であっても、既存の言語表象との一義的な結合によって可能になる再想起とは異なる水準を内包した行為なのである。

こうして、糸巻き遊びは外傷的出来事であった母の不在をただ再現しているのではなく、それを表現しているのだということが理解されるであろう。

2－6．行為化と「表現」

表現はアクティング・アウトという精神分析用語がもつ演劇的側面（アクト＝幕）を強調する概念である。表現された一幕で演じられるのは、虚構であることが意識されうる演劇である。分析の面接中に生起する転移も、設定された分析空間での出来事であるからこれに含まれよう。

他方、アクティング・アウトという語には出演（アクト）の意味がある。ただしこの場合、主体は意識せず現実的状況へと自ら出演し、外傷状況を行為において反復してしまう。「外傷嗜好症」と名づけられた症例の場合、患者は外傷状況を極度に怖れているにも関わらず、そうした状況を自分から求めているかのような行為を現実化することが知られている。たとえば幼児虐待の被害者は無意識に新たな虐待状況に身をおいてしまう。このよう

な患者は幼児外傷を反復することでその除反応を望んでいるのだが、行為として反復するたびに結局は新たな外傷を付け加えてしまうという悪循環に陥っている[18]。

この種の自虐的な反復行為は、同一視によって自己に取り入れられた対象にたいする攻撃であると説明することもできる。主体は自己処罰によって、もとの対象に復讐する。この攻撃がメランコリーの症状を生むだろう[19]。

表現であれ行為化であれ、外傷状況のアクティング・アウトには、理解不能なものを対象化しようとする運動が導く帰結であると解釈することもできる。苦痛を経験すると世界は不安につつまれ、攻撃性はメランコリーを生む。根源的信頼が宙吊りにされた世界は、否定的なもの、敵対的なものという相貌を帯びるにちがいない。苦痛を経験した主体は極度に不快な苦しみのなかに置かれる。しかしこうした受苦の構造を把握できない者にとってこの苦しみはまったく不条理なものに思われるだろう。苦悩をなんとか対象化しようとする試みが表現であり、行為化であると考えられる。行為化においては、結果であるはずの現実化した苦悩が内界の苦悩の原因であると転倒した解釈がなされることで、不条理の圧迫感が軽減されるだろう。

行為化や虚構空間における表現には、苦痛全体の構造が書き込まれている。この書き込まれた構造、いわば苦痛のエクリチュールを読み解くことができたならば、受苦の構造の総体が理解されるだろう[20]。もちろん糸巻きで遊ぶ一歳半の子供はこうした思考能力を発達させていないが、その可能性は与えられている。自虐行為や薬物依存その他であらわれる行為化は、そうした思考の場を構成するために支払うにはあまりに大きな代償をともなうように思われる。

2－7．喪の作業

フロイトは糸巻き遊びを母親への復讐衝動の代理による満足と解釈していた。しかしながらもし母親に「自我」を保証する審級が仮託されていたならば、この攻撃は自己に反転

---

[18] Fenichel.O. *The Psychoanalytic Theory of Neurosis*, New York, 1945, pp.543-544.

[19] "Mourning and Melancholia," *The Standard Edition of Complete Psychological Works of Sigmund Freud, vol.14*, London, 1957,「悲哀とメランコリー」井村恒郎訳、『フロイト著作集 第六巻』人文書院を参照。この点に関しては、近代小説に描かれた「失敗症候群」——表向きの理由もなく強迫的に失敗を繰り返す行動様式——を後悔とのつながりから読み解き近代世界の特質を明らかにする富永の論考がより発展的な理解のための道を示している。富永茂樹「後悔と近代世界」『都市の憂鬱——感情の社会学のために』新曜社、1996年。

[20]「表現」や行為化を苦痛体験のエクリチュール化とみる視点は、作田啓一「酒鬼薔薇君の欲動」『Becoming 1』BC出版、1998年 に示唆を受けた。

しメランコリーを生んだはずである。ところが糸巻き遊びでそうならないのは、「自我」を保証する審級が、母に具体化されているのではなく、より抽象的な水準へと発達しているからだと考えられる。審級としての「自我」が一定度抽象化すれば、主体はより自律的になり、それが不安の軽減に役立つにちがいない。

他方でフロイトは、子供は糸巻き遊びによって受動的な状況を能動性にかえることで支配衝動を満足させているとも解していた。母親に置き去りにされた受動的体験は、彼女の象徴である糸巻きを投げつける能動的な遊びへと転換する。ところで、能動的な立場にたつということは、子供が自分を置き去りにした母親の立場にたつことを意味する。だとすれば子供が放り投げては見出している糸巻きは実は自分自身でもあることになるだろう。新宮一成が呈示するこの解釈からすれば、子供が糸巻きを見出したときの喜びは、帰宅した母が我が子を見出したときの喜びにほかならない[21]。子供は母の欲望を自らのものとしつつ、自分自身の象徴を投棄し無化する所作を反復する。繰り返し投げられるのは、「自我」を保証する審級を母親へと投射し、母子一体の想像的世界を構成するがゆえに彼女の不在を激烈な苦痛として感受した自分自身の隠喩的象徴である。投擲のたびに苦痛が生き直されついに過去の出来事となるならば、それは精神分析でいう喪の作業の原形を示しているだろう。

2－8．周期＝リズム

ところで「草稿」はQに関して興味深い仮説をたてている。私たちはQおよびQ'nを量として考察してきたのだが、フロイトによればこれらは周期の側面ももっている。質的な感覚を説明するためにたてられたこの周期の仮説についてフロイトは次のように記している。

> これまで私はQ'nの通過を一つのニューロンから別のニューロンへの転移 Übertragung であるとだけ考えてきた。しかしそれは、なおもう一つの特性、すなわち時間的な性質をそなえているにちがいないのである。なぜならば、物理学者たちの力学は、外界の他の物体運動にも時間的な特徴づけを行なってきたからである。ここで私はそれを簡単に周期 Period と呼ぶことにする。このようにして私は、接触防壁の一切の抵抗はQの転移に対してしか有効でなく、ニューロン運動の周期はいわ

[21]新宮一成『ラカンの精神分析』講談社現代新書、1995年、152-155頁

ば誘導現象として、どんな制止をうけることもなしにどこにでも伝達されると仮定したいのである［SE1, p.310：247頁］[22]。

周期は一定の反復であるから、これをリズムと言い換えてみよう。リズムは「どんな制止をうけることなしに」心的装置の「どこにでも伝達される」。心的装置はQやニューロンの反復的な運動に「誘導現象」のように引き込まれ、その周期＝リズムに共振する性質をもつ。

代理物の復讐としての投擲ばかりでなく糸巻き遊びの反復がうみだされたのは、母親が子供を遺棄したのではなく不在の後には再び戻るのだという在と不在のリズムが子供によってとらえられたときであるだろう。だから反復するリズムをとらえることは、世界への根源的信頼を再び見い出すことでもある。子供は飽くことなく繰り返し外傷状況を表現し、反復のたびにそこに新たな喜びが生じていた。もはや子供は能動的に遊んでいると言うだけでは不十分であり、遊びそのもののリズムに身を委ねているとみなければならない。いわば自己の「死」であった苦痛体験が喜びのリズムの中で繰り返し見い出されるのである。これは悪夢の反復とはまた別の水準の受動性の体験である。

そして子供は「いない－いた」と声をあげる。発話によって内面の苦悩は誰かへのコミュニケーションへと開かれる。糸巻き遊びが苦痛体験の表現だとすればその声は喪の歌である。たとえ悲しみの歌であろうとも「いない－いた」の歌を響かせ波のように寄せては返すリズムと共振するとき子供は苦悩の彼方へ運ばれているだろう。

私たちが「草稿」と糸巻き遊びの考察の最後にたどりついたのは、このような周期＝リズムが聴こえてくる地平である。

苦痛の体験は取り消し不能の痕跡を刻みつけるのであるから、その「外傷」から完全に「回復」することは不可能であるかもしれない。それは不条理なほどの不安と苦悩をもたらしもするだろう。しかしながらそれは汲み尽くせぬ表現の源泉でもある。不可能なものを掌握しようとする運動は苦痛のエクリチュール化の試みを果てしなく反復する。そして新たな糸巻きが宙に舞い、新たなことばが紡ぎ出されることだろう。

---

[22]一八九五年にフロイトが当時の物理学を念頭に書いていることを承知で言うのだが、Qの量と周期の二面性という仮定には、力学よりはむしろ、光は粒子であり波動でもあるという量子力学の議論を引き合いにしたい誘惑にかられる。光は粒子としての性質が遮断されても波動の性質は伝導するとされるからだ。

英訳スタンダード版におさめられたフロイトの著作については以下のように略記した。

Sigmund Freud

［SE1］ "Project for a scientific Psychology", translated by James Strachey. in James Strachey ed., *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, vol.1,* London, 1966.「科学的心理学草稿」小此木啓吾訳、『フロイト著作集 第七巻』人文書院、1974年。ただし人文書院版にはスタンダード版のストレイチーによる解説は収録されていない。

［SE18］ "Beyond the Pleasure Principle", translated by James Strachey. in James Strachey ed., *The Standard Edition, vol.18,* London, 1955.「快楽原則の彼岸」小此木啓吾訳、『フロイト著作集 第六巻』人文書院、1970年

［SE20］ "Inhibitions, Symptoms and Anxiety," translated by James Strachey. in James Strachey ed.,*The Standard Edition, vol.20* , London, 1959.「制止、症状、不安」井村恒郎訳、『フロイト著作集 第六巻』

（おかざき　ひろき・研修員）

Shock and Repetition: A Reinterpretation of Trauma through Freud's *Project for a Scientific Psychology*

Hiroki OKAZAKI

Confronted with so shocking a event which gives too extraordinarily intense impression, one will lose self-control. Such experience, sometimes so delightful, sometimes so sorrowful, can change one's personalty fundamentally . What does the shock bring about? How does the experience of the shock have its overwhelming influence on a person? Where is the person whom the shock left its mark on destined to go? In order to throw light on these questions, I would like to examine the phenomenon called psychological trauma. It is not the aim of this paper to define the trauma or to examine many psychotherapies which are designed to remend it, but to examine how traumatic events occur just to get some clues to an understanding of extraordinarily intense experiences, where one may find some suggestive conclusion for sociological studies. For this purpose Sigmund Freud's *Project For a Scientific Psychology* is, which tries to explain all the psychological phenomena with its original neuron theory, is examined. It seems to give us no less remarkable theory to understand psychological trauma than his later writings. In fact *Project* itself does not refer to the trauma. Nevertheless the concept of Pain in *Project* seems to be full of suggestions if we regard it as one that means the traumatic event. For instance it shows that the peak of Pain namely the moment when such events are the most intense cannot be memorized in normal way. It implies the impossibility of the complete recovery which psychotherapy that attaches great importance to remembrance of traumatic experience supposes to attain. *Project* model can explain the reason. It also shows that the anxiety which derived from experience of Pain can establish the system of ego.

In the second part of this article, what the phenomenon called recovery from trauma means will be considered, by examining, from the standpoint of the neuron theory of *Project*, the play of a child who experienced traumatic situation. In the study of the trauma we find many sorts of repetition. The dreams of those suffering traumatic neurosis repeat the same scene of traumatic situations. Those patients sometimes repeat the same traumatic situation as they had experienced before in the actual stuation: it is called acting-out. While, the child repeats the play which seems to express the traumatic situation. I will examine the different levels of these repetitions and show the significance of creative repetition of the play of the child, which seems to imply the possibility of impossibile recovery.